

Title	キリマンジャロにおけるバナナの生産・販売の特質 - 「女性産物」が追求する家計安全保障-
Author(s)	辻村, 英之
Citation	生物資源経済研究 (2013), 18: 85-102
Issue Date	2013-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/173173
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

キリマンジャロにおけるバナナの生産・販売の特質 ——「女性産物」が追求する家計安全保障——

辻村 英之

Hideyuki TSUJIMURA : Characteristics of Banana Production and Sales in Kilimanjaro: Security of Household Economy Pursued by "Female Products"

The security of the household economy on the basis of “security of food consumption” and “security of daily necessities consumption” has been pursued so far at Lukani village, on the western slope of Mt. Kilimanjaro in Tanzania, through the cultivation of maize and “female products” (bananas, milk, beans, etc.). In contrast, “male products” such as coffee have pursued economic rationality and maximum revenues. One of the main characteristics of the farm household economy at Lukani village is that the peasants emphasize on the importance of balancing these two sectors, without unification and specialization.

Firstly, this paper aims to clarify details of the aforementioned “security of food consumption” (“security of harvesting” and “gradual sales after securement of the volume of in-house consumption”) and the “security of daily necessities consumption” (“purse function”) through a case study of bananas, which is a leading female product.

The second aim of this paper is to form a quantitative understanding of (1) the importance of in-house production of livestock manure, which is one of main factors that facilitate these two securities without management costs; and (2) the importance of the in-house production of ingredients (bananas, maize, milk, etc.) for staple food items.

Finally, this paper investigates the latest situation where bananas are being sold excessively in order to cover the losses incurred by declining sales of coffee, which used to be a leading “male products”. It is important to note that the security of the household economy, pursued by “female products”, is facing a crisis.

1. 本論文の分析課題

拙稿¹⁾で論じたように、ルカニ村（タンザニア北部・キリマンジャロ山の西斜面（標高1,500～1,700メートル）にあるチャガ人（キリマンジャロ山の住民の総称）の1農村）においては、トウモロコシ、豆類、バナナ、牛乳などの複合経営によって、食料用産物の最低限の収穫水準が維持されている（「収穫の安全保障」）。またそれらを販売することが増えているが、自家消費分を確保した上での「漸進的販売」であり、市場調達せずにすんでいる。最低限の食料消費の水準が維持されているのである（「食料消費の安全保障」）。

同じくバナナと牛乳は、生活必需品（山中で生産できない農畜産物、被服・身の回り品）を購入するための十分な額で満たされた「財布」として機能している。その「財布機能」によって、最低限の生活必需品消費の水準が維持されている（「生活必需品消費の安全保障」）。

以上の「食料消費の安全保障」（←「収穫の安全保障」+「漸進的販売（自家消費分の保管）」）

と「生活必需品消費の安全保障」を実現し、最低限の家計水準の維持に努めるのが「女性産物」の役割である。

その家計安全保障を追求する「女性産物」とは対照的に、コーヒーをはじめとする「男性産物」は、経済合理性、利益最大化を追求する（販売収入の主な支出費目は、次年度の農業経営費、家屋建設費、教育・医療費、社会開発費）。両者を明確に区分するが、どちらかに特化することはなく、両者のバランスを重視する。それがチャガ人の農家経済経営の特質である。

そこで本論では、2005年3月、5月、8月の3回の現地調査（特にルカニ村における参与観察と聞き取り調査²⁾）で収集したデータをもとに、「女性産物」の主役であるバナナを事例として、上記の「収穫の安全保障＋漸進的販売（自家消費分の保管）→食料消費の安全保障」、「財布機能→生活必需品消費の安全保障」についての詳細を解明する（4～5節）。

その両者の「安全保障」ともに、堆肥が重要な役割を果たすが、自家生産により「脱費用化」されており、肥料費がかからない。つまり経営費を増やさずに「安全保障」を実現する要の1つが自給堆肥である。その「脱費用化」の大きさを、市場価格で評価して量的に把握することにも努める。

なお「脱費用化」とは、拙稿³⁾で提起した、経営費（現金支出）を増やすことなく、内部化された生産要素の効率的利用と生産物・副産物の内部循環によって農業生産・経営する努力を、高く評価するための概念である。本論で解明する堆肥の自家生産、別稿⁴⁾で解明した自給飼料の給餌や女性による自家労働、別稿⁵⁾で解明した混作などがこれに相当する。この「脱費用化」による低費用農業の探求は、同じく拙稿⁶⁾で強調したように、財務リスクへの重要な対応策になる。

それらの分析の前にまず、現地調査で確認できたバナナの地方品種を紹介し、それぞれを用途ごとに分類する（2節）。

次に上記の「男性産物」と「女性産物」の区分や「女性産物」の役割を含む、現在（2005年時）のバナナの重要性やバナナをめぐる経営構造・行動の特質に対して、強い影響を与えているチャガ人の伝統・慣習について、聞き取り調査の成果をまとめる（3節）。その慣習の弱体化、そしてバナナの過剰販売という両産物の区分・役割が弱まって、「おわりに」において論述する、近年の「家計安全保障の危機」（2010年9月、2011年9月、2012年9月の現地調査で確認⁷⁾）が生じていると理解されたい。

さらに6節において、同じく現地調査で確認できたチャガ人の平均的な食生活を紹介した上で、そのための食材で自家生産（家計仕向け）する農畜産物の大きさについて、同様に市場価格で評価して量的に把握する（主に青空市場における、2005年の価格調査のデータを利用）。バナナ、トウモロコシ、牛乳をはじめとする食料用産物の家計仕向けの意義を強調するためである。

2. ルカニ村で確認できるバナナの地方品種

- (1) 「主食 (の食材)」用：①ムレレンボ (Mlelembo)、②ムショノア (Mshonoa)、
③キシエレット (Kishereto)

「ムシャレ (Mshare)」と総称される。「主食」用で、村民の食生活にとって最も重要なバナナである。そのまま茹でてかじったり、野菜や肉などとともに煮込んでバナナ・シチュー(「マチャラリ」)を作る。朝食用の揚げバナナや、完熟させて果物用にも利用できるが、もったいないので使わない。

その中でも最も重要なのは、大きくてやわらかく、最もおいしいとされる「①ムレレンボ」であり、家から近い収穫しやすいところで堂々と育つ。村内の約50%のバナナが同種であるという。祝祭時(クリスマス、新年、教会の各種儀式、結婚式など)や客の来訪時には欠かせないため、それらが増える10月末～1月初めまで収穫せずに残しておくことが多い。またムレレンボに関しては、できる限り周年収穫を実現させたいため、標高の低い(暑いので収穫時期がずれる)ところに畑を持つ村民は、そこでも積極的に生産している。水辺や堆肥の利用も積極的である。「②ムショノア」と「③キシエレット」の生産量は、合わせて10%程度である。

「主食」用バナナ、特にムレレンボとムショノアは、青空市場(主にラワテ市場)で高く販売できる。700～2,000Tshs/束(大きさと需給関係で変動。最大のムレレンボとムショノアは、年末などに5,000Tshsで販売できる時もある)である。

- (2) 果物用：④キマリンディ (Kimalindi)、⑤キスカリ (Kisukari)

1週間程度、台所や納屋で完熟させて、果物として消費する。キマリンディは、酒に利用されることもある。

ともに青空市場で、果物用として高く販売できる。大きい「④キマリンディ」(日本で消費されているキャベンディッシュの1種)が700～2,000Tshs/束(最大のものを年末などに、3,000Tshsで販売できる時もある)、小さい「⑤キスカリ」(沖縄の島バナナと同種)が500～1,000Tshs/束で販売できる。

キマリンディは20%の割合で、村内において生産されているが、キスカリは1%にも満たず、持っていない農家が多い。

なお下記の酒用や「ムトリ」用バナナも果物として食べることがあるが、市場では販売できない。

- (3) 酒用：⑥ドゥヤ (Duya)、⑦イフナイア (Ifunaia)、
⑧キスカリ・ウガンダ (Kisukari Uganda)、⑨ムラリ (Mlali)

十分に熟したバナナを水に漬け、大きな鍋で6時間煮立てる。その後、3日間放置して発

酵させる。さらに4日めに液体だけを絞り出し、それに発芽したシコクビエの粥（100度まで煮立てる）を加えて、1晩発酵させる。6日目の朝にはバナナ酒（「ムベゲ」）を楽しむことができる。近年、家庭での酒造りは祝祭時のみで、日常的には中央広場の酒場で飲用する。そのため酒用バナナは、青空市場での販売が多い。

束のままだと500～800Tshs（最大のものを年末などに、1,000Tshsで販売できることもある）であるが、皮をむいてバケツに詰め（1.5～2束が入る）、バナナの葉でふたをして出荷すると、1,000～2,000Tshs／ティン（年末などに3,000Tshsで売れることもある）で販売できる。

酒用バナナのシェアは10～15％であるという。

- (4) 「ムトリ」用：⑩トケ（Toke）、⑪キタラサ（Kitarasa）、⑫キムリア（Kimulia）、
⑬ムナナンボ（Mnanambo）

1時間以上ゆっくりと煮込んで果肉を溶かし、バナナ・スープ（「ムトリ」）を作る。「⑫キムリア」は主食、「⑬ムナナンボ」は揚げバナナ（油で揚げることが一般的になり、伝統的な焼きバナナは消えつつある）にも利用される。

「ムトリ」用バナナのシェアは5％程度であるという。販売することはあまりないが、トケであれば、500～1,200Tshs／束（年末などに1,500Tshsで売れることもある）で販売できる。

なお「⑥ドゥヤ」、「⑦イフナイア」、「⑪キタラサ」、「⑫キムリア」は、その葉や仮茎はもちろん、果実を牛（ゴンベ）の飼料にすることも多く、そのため「ンディジ・ゴンベ」と呼ばれている。

- (5) 揚げバナナ用：⑭ムボウェ（Mbwe）、⑮ムズズ（Mzuzu）、
⑯ムコノ・ワ・テンボ（Mkono wa tembo）、
⑰ムコノシ（Mkonosi・ボコボコ（Bokoboko））

油で揚げて、朝食に利用される。「⑭ムボウェ」「⑮ムズズ」「⑯ムコノ・ワ・テンボ」は同種だが、前者は1つの木（株）に1～2房の果房しか付かない小さなもので、後者になるほど大きくなる。販売することはない。

揚げバナナ用のシェアは1％足らずで、1農家は3本程度の木しか持っていない。

- (6) その他：⑱ウガンダ（Uganda・ブコバ（Bkoba））、⑲ウリレ（Urile）、
⑳イサンガル（Isangaru）

たいへん少数であるが、ウガンダからブコバへ普及したという品種を育てている村民もいる。主に果物用であるが、主食として利用されることもある。同じく少数であるが、果実が茶色のウリレを育てている村民もいる。

野生バナナを育てている農民もいる。種子がとれるので、それを砕いて粉にし、傷口の消毒や下痢止めに利用する。

3. バナナをめぐるチャガ人の伝統・慣習：バナナの多様な役割

(1) 男性と女性の分け隔て：「男性産物」と「女性産物」の区分

チャガ人の伝統的な世界観の中で、男女の関係は最重要なものであった。両者の適時で適切な結び付きは、生命や繁栄をもたらすが、不適切な組み合わせ（不倫、近親相姦など）は、死をもたらすと考えられた。そのため男女を分け隔てること、両者の居場所や持ち物を分け隔てることで、危険な接触を避け、「秩序」を保とうとした。

農畜産物を「男性産物」と「女性産物」に明確に区分することも、「秩序」を保つために必要であったという。

「男性産物」は土地・家屋と同様、拡大家族の資産とみなされ、その繁栄につながるもので、当初は牛、羊、やぎ、樹木などであった。その一方で「女性産物」については、日常生活を維持するものであり、バナナ、トウモロコシ、牛乳、にわとりなどであった。ここに大きな販売収入を生み出すコーヒーが導入され、同じく資産とみなされるようになった。

小さな「女性産物」については、処分を女性に任せてよいが、大きな「男性産物」については、慣習に忠実に、拡大家族の繁栄につながるように管理するのが、男性の重い責務であったという。

たとえば、大きなコーヒー販売収入について、教育費、医療費、家屋建設費にしっかり振り分けることは、男性しかできない。もし妻が、その支出先に口を挟むと、食料や衣類、そして妻の両親など（他の拡大家族）に、多くのお金を流そうとしてしまい、拡大家族の繁栄につながらない。夫婦喧嘩の種となり、「秩序」が乱れてしまうので、「男性産物」の処分については、女性に関わらせなかったという。

現在も「男性産物」と「女性産物」の区分や、それらの役割の違いは、そのまま慣習として残っている。ただし「男性産物」も「女性産物」も、男女が話し合って処分を決めないと逆に夫婦喧嘩になるなど、男女を隔てる慣習は弱まっている。

(2) 「家庭畑（バナナ畑）」に対する環境倫理観

チャガ人は山中にある家屋を取り巻く「家庭畑」と、山麓にある「下の畑」（徒歩で1時間以上の平野部にある）の2つの畑を持つのが一般的である。「下の畑」においては、ハイブリッド種や化学肥料を活用して、トウモロコシの生産性を強く追求している。土壌劣化が進んでいることに住民は気付いているが、あまり深刻視していない。

対照的に「家庭畑」（伝統的には、森林を切り拓いて、主食であるバナナ、そして芋類、

果物類などを混作する畑であったが、イギリスの植民地時代に、この「バナナ畑」にコーヒーが取り込まれた)においては、山中に古くから自生する豆科の高木「ムルカ」をはじめとした林木が、畑の地力維持・水分保持に役立つという伝統知識の下で、アグロフォレストリーが展開されてきた。コーヒーの木が直射日光に弱いため、林木、果樹、バナナなどを日陰樹として求めることも、アグロフォレストリーの重視につながっている。

さらに家畜のふんを、乾燥させたバナナの葉などからめて堆肥化し、主食であるバナナの根元に毎日のように施肥している。それはマルチの役割も果たすため、同じく畑の地力維持・水分保持に貢献し、無化学肥料栽培が可能になっている。

「家庭畑」に対してのみ、高い環境倫理観を抱えてきた理由は、日常生活圏の中心に位置することだけでなく、既に薄れつつあるが、チャガ人の伝統的な祖先・祖霊信仰にあるようだ。

首長が再分配権を持っていた「下の畑」については、先祖代々の畑という意識は弱い。しかし「家庭畑」は、拡大家族（リネッジ）が永続的に占有できる畑であり、息子への分割相続がなされてきた。先祖の遺体は畑の中に埋葬され（現在は教会の墓地に埋葬されることが増えた）、畑を不法に占拠する部外者には、祖霊によって不幸がもたらされると考えられた。チャガ人はバナナによって育てられるが、その肥料となる家畜の糞も同様に、チャガの豊かさ・繁栄を生み出すものと考えられた。

(3) 過去のバナナの多様な役割

牛のように資産とみなされることはなかったが、バナナはチャガ人の伝統的主食であり、チャガの先祖代々の豊かさ・繁栄を生み出すものとされてきた。牛肉・バナナ酒・バナナ（特に主食の「マチャラリ」に最適のムレレンボ）料理は1セットでとらえられ、それらが不足すると不幸福感が増した。またバナナは基本的に「女性産物」でありながら、大きくて重たいムレレンボ、そしてムナンボ（朝食の焼きバナナに適していて、男性はブラックコーヒーとともに楽しんだ）のみは、男性がバナナの木に支え棒を設置することで「男性産物」と化し、男性の権威の象徴となった。

そして羊・やぎと同様、原因不明の病気・事件や理解不能なできごとが生じ、呪術医などが祖霊の怒りを原因とみなした場合、バナナ酒を祖霊への供え物として捧げ、それらの不運さを避けようとした。

例えば男性の病気・事件の場合はムレレンボの木の下で、キリマンジャロ山の方を向いて土に4つの丸を書き（3つの丸は各世代（父、祖父、曾祖父）の祖霊に対して、1つの丸はクラン外からのお客の霊に対して）、それらに酒を注いで祖霊に捧げた。女性の病気・事件の場合はムラリの木の下で、母、祖母、曾祖母の祖霊に対して祈祷した（食事関連の女性の病気・事件の場合、女性の場所である台所で行うこともあった。また女性の場合、家畜や酒でなく、トウモロコシのお粥を供物とすることもあった）。

さらに成婚時の婚資として、新郎側が新婦の両親へ、牛とともにバナナ酒を贈呈した。同じく首長への貢ぎ物（特に土地配分に対するお礼）としても、牛とバナナ酒が贈呈された。

儀式・会議・祝祭時はもちろん、コーヒーとトウモロコシの収穫が終わり、また温暖な気候となる10～12月には、毎日いずれかの村民がバナナ酒をふるまい、多くの村民がそこに集まった。酒を楽しむだけでなく、バナナ料理、歌・ダンスを楽しんで、議論や親交を深めた。

つらい農作業の後にもバナナ酒を欠かすことができず、それで体を温めないと睡眠することができなかつた。また農作業を手伝う報酬は、バナナ酒とバナナ料理だけであった。

バナナ酒をふるまうことは、その相手に尊敬の念を表すことであり、たとえば喧嘩の仲直りをする時にも、バナナ酒は欠かせなかつた。また過ちを犯した際に許しを請う時、イサレという草の葉をたたんでバナナ酒に浸け、相手に差し出すという慣習もあった。

さらに50～60年代までのチャガ人の家屋は、壁は土製で屋根はバナナ（の仮茎の外皮）葺きであった。敷地の垣根には、乾燥させたバナナの葉が利用されていた。

（4）現在のバナナの多様な役割

学校給食で「ウガリ」を食べることに慣れ、若者たちはトウモロコシの方を好むようになってきているが、現在でもバナナはチャガ人の主食であり続け、チャガの豊かさ・繁栄を生み出すものとして大切にされている。

上記の乾燥させた葉などを堆肥の材料にすること、直射日光に弱いコーヒーのシェイド・ツリー（日陰樹）になること、下記の葉・仮茎・果実が牛の飼料になること、などの農林畜複合経営をめぐる役割、そして「女性産物」の主役としての役割も従来通りである。

しかし首長制度は廃止され、祖霊信仰も消えつつあり、首長や祖霊と親交を深めるためのバナナの役割（首長への貢ぎ物、不運さを避けるため祖霊へ供え物、祖霊との交流の場としてのバナナの木）や、男性の権威の象徴、尊敬の念の表明などの慣習は消えた（そのためムナンボやムラリは軽視されている）。

ただし牛肉・バナナ料理・バナナ酒の不足が不幸福感を増すことや、親交・議論を深めるための役割変わらない。

現在においても、結婚式や葬式をはじめとする儀式、重要なクラン会議、クリスマスやイースターなどの祝祭時にお客を歓待するためには、主食用バナナ「ムシャレ」（特にムレレンボ）とバナナ酒が欠かせない。クラン会議にそれらが欠けると、議論がなかなか進まないという。

また結婚式は、まず新郎側がバナナ酒を用意し、新婦の両親にふるまって「娘さんをいただきたい」と請うところからはじまる。その後、婚資（近年はそのバナナ酒に加え、若い雌羊、家財道具（毛布、衣類など）など）の引き渡しながされる（キリスト教式の結婚式が増えており、その場合は公式には、アルコールをふるまわれないが、非公式に裏庭などでお客に提供されている）。

その前に開かれる婚約式の時も、新郎側が新婦側に対して、十分や食事（特にバナナ料理）

やバナナ酒をふるまえないと、婚約が成立しないこともある。また男性が、結婚のお願いに恋人の両親を訪問する際も、バナナ酒を持参することになっている。

トウモロコシの収穫時などに労働者を雇うことが増えたが（大家族間での無料の労働提供（労働交換）も続いている）、賃金が安価であるため、バナナ料理・酒をふるまうことが続いている。ただ雇用者は若者が多いので、最近では酒を出さず、料理もトウモロコシ料理（下記の「マカンデ」が多い）に変わりつつある。

またバナナ葺きの家屋は消滅したが、仮茎の外皮を壁・天井に利用した納屋が残っている。バナナの葉の垣根も残っている。

その他、昔はそれらの利用が一般的であったが、現在はまれに利用するものとして、葉を利用した食器・包装・傘、仮茎の外皮を利用したロープ・運搬具（仮茎の皮に堆肥などを載せて運搬）・鍋置き・シート、などを挙げることができる。「バナナには無駄なところがない」と、村民たちは強調する。

4. バナナ生産の特質：

「収穫の安全保障＋漸進的販売（自家消費分の保管）」→「食料消費の安全保障」

(1) 「収穫の安全保障＋漸進的販売（自家消費分の保管）」と「脱費用化」

1) 「収穫の安全保障」

バナナの木（正確には多年草）は「家庭畑」に、数え切れないほど（村民自身は自らの栽培数を把握できていないが、著者が2005年8月、複数の畑で数えたところ、「家庭畑」（平均1 ha）に500株（親株のみ）余りである）植わっており、しかも栄養繁殖する。つまり放っておいても、親株の根元（根茎）から次世代の吸芽がいくつも（3～4つは確認できる）生え出てくる。

ただしすべての吸芽を育てると、養分、水分、日光を奪い合うという。そのため、元気な吸芽を1～2つ選択して、あとは伐採するか、空間に余裕のある場所に移植する（移植の際には大きな穴を開け、先に投入した堆肥の上に株を置く）。

バナナの葉などは乾燥させて、しばらく牛の寝床にする。その後、バナナの葉が絡んだ糞を牛舎から掻き出し、しばらく堆積させる。この堆肥をバナナの根本に毎日のように投入する。肥料として機能させるには、堆積後3～6ヶ月が必要であるが、マルティングの役割もあるため、堆積後1～2週間で投入してしまい、根元で十全な堆肥化を待つ村民が多い。

その結果、品種、雨量、地力（堆肥の量）によって違いはあるが、1～1年半後にはつぼみが付く（土壌になじんだ古い株であれば、7～8ヶ月でつぼみを付ける品種もある）。

親株がつぼみを付ける頃には、既に次々世代の吸芽（孫株）が顔を出しており、3世代の

同居となる。親株（仮茎）は果実を収穫した直後に、上記の競合を避けるためにすぐに伐採される（ただし根元を30センチほど残して伐採する。その部分から子孫へ、養分が提供されるからだという）。このようにバナナの木は、2～3世代の「家族」が1ヶ所で、仮茎や葉をすり寄せ合って成長するのが一般的である。

木（仮茎）と同様、花や果実も雨と堆肥の量に依存した成長をみせる。品種、雨量、地力（堆肥の量）によって違いはあるが、つぼみ（花序）が付いてから5～7ヶ月で収穫可能になる。すなわち、吸芽が出てから早く（水分と堆肥が十分に与えられた、早熟品種の古株の場合）1年、遅くても2年余りで収穫できる。管理が十分になされない場合は、3年かかることもある。

小雨季の10月半ば～12月、大雨季の3月末～7月に、多くを収穫することができる（最盛期は4～7月半ば）。しかし乾季であっても、水辺（川、湿地、灌漑のわき）や堆肥（鋤込やマルチング）を活用して、周年収穫（「収穫の安全保障」）に努めている。

2) 「漸進的販売（自家消費分の保管）」

通常時であれば、畑に植わっているバナナの量は家計仕向け量を大きく上回るため、自家消費分の確保が意識されることはない。

トウモロコシの意図的な、「漸進的販売（自家消費分の保管）」とは異質であり（牛乳の場合は搾乳後にすぐに消費し、その余剰分を販売するため、「保管」ではない。豆は豊作時には「漸進的販売（自家消費分の保管）」となるが、通常時は余剰が少なく、また「女性産物」であるため、トウモロコシのような積極的な販売はしない）、本論ではバナナの「自家消費分の保管」を強調しない。

しかしバナナが主食である限り、あるいは下記の「財布」である限り、一気に大量販売することはない。「漸進的販売（畑における自家消費分の保管）」と表現することもできよう。

3) 肥料費の「脱費用化」

以上のように、「収穫の安全保障」（食料作物の最低限の収穫水準の維持）を実現するためには、水分と地力（家畜ふん堆肥）が重要である。しかし堆肥を購入することはほとんどなく、「収穫の安全保障」経費は皆無に等しい。

もし年間分（軽トラック1台分）の堆肥を購入すると、12,000～15,000Tshs（+軽トラックのレンタル代が15,000～20,000Tsh）である。つまり堆肥を自家生産することで、27,000～35,000Tshsが「脱費用化」されている。

(2) 「食料消費の安全保障」（表1）

バナナの収穫量が減る（水分が不足する）8月～10月半ばは、準主食であるトウモロコシの収穫期（「下の畑」では7月末～9月半ば、「家庭畑」では9月半ば～10月半ばが収穫期）

と重なる。1月はまさに、水辺と堆肥を活用して、バナナの収穫に努める時期である。2月は祝祭や客の来訪の時期が終わり、消費量自体が減退する。

さらにトウモロコシと豆類は、保管して1年中消費できる。芋類は8～9月が食べ頃だが、畑に埋めておいて、1～3月の食料不足時に消費されることも多い。牛乳や卵も毎日、確保できる。

このようにバナナを中心とし、その他の食料産物（トウモロコシ以外は「女性産物」）も組み合わせて、年間を通して十分な食料を確保できている。「収穫の安全保障」の追求と「自家消費分の保管」により、「食料消費の安全保障」が実現しているのである。

5. バナナ販売の特質：「財布機能→生活必需品消費の安全保障」

「女性産物」バナナは、女性が日常的に、主体的に販売する。そして販売代金は、家計維持のための農畜産物や日用品の購入に利用される。その販売と買い物の仕方も独特である⁸⁾。

販売先はラワテ市場（月、木曜日に開設）である。訪問の目的としては、販売→現金収入より、買い物の方が重要である。そのため市場へ持参するバナナの量は、いくらの買い物をするか、逆算して決めるという。あるいは出荷できるバナナがない時には、市場に行けないという。市場ではまずバナナを販売し、その販売代金により山中で栽培できない野菜や、日用品を購入して帰村する。

そのようにバナナは、女性にとって、あるいは家計維持にとって、「財布機能」を果たす最重要な農産物である。バナナは自然に育つので、牛に対する飼料ほど懸命には見えないが、しかし毎日のように、バナナの根元に堆肥を投入しているさまは、家計維持のために十分な額のお金を、常に「財布」の中に貯めておこうとする努力のように見える。

すなわちバナナと牛乳は、ただの「財布」ではなく、家計維持に十分な額で常に満たされている重い「財布」の役割を果たしている。バナナを重い財布にするのは堆肥、牛乳を重い財布にするのは飼料である。

上記の「収穫の安全保障」「食料消費の安全保障」にとどまらず、自家生産できない食料と日用品の消費を下支えする「生活必需品消費の安全保障」についても、バナナが重要な役割を果たしていることがわかる。

6. チャガ人の食生活と家計仕向けの大きさ

(1) 本節の課題

T氏が出稼ぎに出る前（2004年3月時点）のT農家（夫婦と子供（小学生）3人の5人家族）

の食生活は、伝統食重視のチャガ人（少なくともルカニ村民）の平均的世帯のものであったと考える（聞き取り調査で確認）。

そこで本節では、T農家の食生活、すなわちルカニ村民の平均的な食事（伝統食重視）の内容を明らかにすることで、特に主食としてのバナナとトウモロコシの重要性を強調する。さらにそれらの食材を購入するものと自給するものに分け、後者の自家生産（家計仕向け）の大きさを、市場価格で評価して量的に把握する。

（2）T農家の食生活と食材

1) 朝食

揚げバナナ、ゆで卵（塩をふる）、紅茶（牛乳と砂糖を入れる）が一般的。揚げバナナの代わりに、食パンをかじることもある。食パン、紅茶の葉、砂糖、塩は購入するが、バナナ、卵、牛乳を購入することはない。

卵は1個60Tshsで購入することができる。卵は毎朝1人1個程度の消費である。そのため、1日で300Tshs（60Tshs×5個）相当の卵が家計仕向けされている。

2) おやつ

10時あるいは15時頃に食べることが多い。「ウジ（ポリッジ）」、焼きトウモロコシ、落花生（購入）が多く、各種の果物が畑になっている時は、それをかじることもある。バナナを完熟させて、果物として生食することもあるが、ひんばんではない。

トウモロコシ粉（センベ）のウジとシコクビエ（ウレジ）粉のウジがある。シコクビエ粉の場合は購入となるが、トウモロコシ粉の場合は自給である。牛乳（ヨーグルト）と砂糖もウジの材料になる。

3) 昼食・夕食

昼食がトウモロコシ（「ウガリ」、「マカンデ」が多い）の場合は、夕食はバナナ（「ムトリ」（バナナ・スープ）、「マチャラリ」（バナナ・シチュー）、「ンディジ・ナ・ニヤマ」（ゆでバナナに付け合わせの牛肉）が多い）というように、昼食と夕食はメニューを回転させる。米、チャパティー、鶏肉、魚を食べることもある。

①トウモロコシ

「ウガリ」（トウモロコシの粉を熱湯で練り上げて固める）の場合は、トウモロコシ粉のみが材料だが、付け合わせに野菜（ムチチャ、ナフ、キャベツなど）、牛肉、豆、ジャガイモなどが利用される。トウモロコシと豆以外は、購入される（ムチチャやジャガイモを、自給する村民もいる）。「マカンデ」（トウモロコシ粒と豆を煮る）の場合は、トウモロコシ粒、豆、スパイス用野菜（ニンジン、タマネギなど）、塩が材料になる（牛肉を使うこともある）。ト

ウモロコシ粒と豆以外は購入となる。

以上のように利用されるトウモロコシは、1週間に1ガロン（約4キロ）程度、消費されるという。トウモロコシは購入すると、約1,000Tshs / ガロンであり（価格変動が激しい）、1週間で1,000Tshs 相当が家計仕向けされていることがわかる。

②バナナ

「ムトリ」の場合は、バナナ、牛肉、ジャガイモ、塩が材料になる。「マチャラリ」の場合は、バナナ、牛肉、ジャガイモ、豆、スパイス用野菜（ニンジン、トマト、タマネギなど）、塩が材料になる。「ンディジ・ナ・ニヤマ」は、バナナ、牛肉、塩が材料である。バナナ以外は購入となる。

バナナは1束（バンチ・全房）3～4房（クラスター・果房）程度の小さいもの（購入すると700～1000Tshs）から、6～7房の大きいもの（1500～2,000Tshs）まで様々だが、大きいものであれば1週間1束で十分である（生産量が比較的安定しており、価格変動は需要が増加する、年末の祝祭時やトウモロコシ不足時のみである）。1週間で1,500Tshs 程度の家計仕向けが実現していることになる。

4) その他

以上のように利用される豆は、1週間に2分の1ガロン（約2キロ）程度、消費されるという。大豆であれば約2,500Tshs / ガロン、ササゲであれば約1,700Tshs / ガロンで購入できる。それゆえ1週間で、1,000Tshs 相当が家計仕向けされていることになる。

牛乳は夕食時の紅茶にも利用される。また「ウガリ」を食べる時に、牛乳（ヨーグルト）を飲むことが多い。以上のように利用される牛乳は、1日に2～3リットル消費される。牛乳（ヨーグルト）の価格は、隣人からの購入だと200Tshs / リットル、ラワテ市場だと250Tshs / リットルである。それゆえ1日で約600Tshs 相当が家計仕向けされていることになる。

その他、鶏肉の消費は1ヶ月に1回程度で、購入することはない。祝祭時や客の来訪時に消費が増える（あるいは市場に牛肉がない時）。鶏は1羽で2,000～3,000Tshs なので、1ヶ月に3,000Tshs 相当が家計仕向けされていることになる。ヤギのと殺は祝祭時のみである。

なお調理油も、ヒマワリの収穫量が平年並みであれば、自給することができる。1ヶ月1リットルの消費で、購入価格は1,500Tshs / リットルである。つまり1ヶ月1,500Tshs 相当が家計仕向けされている。

(3) 家計仕向けの大きさ

以上の数値から、T農家の1ヶ月間の家計仕向けの総額を試算する。

卵： 9,000Tshs（300Tshs × 30日）

トウモロコシ： 4,000Tshs（1,000Tshs × 4週間）

バナナ：	6,000Tshs (1,500Tshs × 4週間)
豆：	4,000Tshs (1,000Tshs × 4週間)
牛乳：	18,000Tshs (600Tshs × 30日)
鶏肉：	3,000Tshs
調理油：	1,500Tshs

消費の重要度を聞き取り調査すると、バナナ、トウモロコシ、豆、牛乳、卵の順になるが、市場価格（畜産物は高価）で評価した消費額は牛乳、卵、バナナ、トウモロコシ、豆の順になる。

以上を合計した家計仕向けの総額は45,500Tshs、主に炭水化物を提供するバナナ、トウモロコシ、豆などの主食に限ると14,000Tshsになる。

さらにT農家の現金現物日記帳（2004年3～4月、2005年1～2月。現金支出のみ計上）を集計し、1ヶ月あたりの平均にすると、家計費が55,788Tshs、その内の飲食費が29,325Tshs、その内の主食費（食パンや米などの購入費）が5,925Tshsとなる。

ここから、自給分を含めた家計費の総額が101,288Tshs、飲食費の総額が74,825Tshs、主食費の総額が19,925Tshsとなる。そして家計費の44.9%、飲食費の60.8%、主食費の70.3%が家計仕向けで埋められていることがわかる（エンゲル係数は73.9%、飲食費自給率は60.8%）。

7. おわりに：バナナの役割の変化と家計安全保障の危機

(1) バナナの役割：主食から日陰樹・飼料まで

以上のようにバナナはチャガ人にとって、最重要な主食（「主食」・果物・酒原料・スープ食材など）であるのみならず（1ヶ月間のバナナの家計仕向け額は6,000Tshで家計仕向け総額の13.2%。主食（炭水化物）に限ると総額の42.9%）、儀式・会議・祝祭などで親交を深める「潤滑油」、婚資の一部、労賃の一部、などの多様な役割を果たしている。

そして「女性産物」の主役として、「主食保障機能」や「財布機能」を果たし、家計安全保障に貢献している。

また直射日光に弱いコーヒーの日陰樹としての役割を果たしている。それが作る陰はさらに、土壌の水分保持や浸食防止にも役立つ。バナナ生産とコーヒー生産は、深く結び付いている。

加えてバナナは、その葉・仮茎・果実が牛の飼料となり（特に水分補給に貢献）、もう1つの女性の「財布」である牛乳の搾乳に貢献する。そして今度はその牛の糞が堆肥化され、バナナやコーヒーの成長を促すのである。バナナ生産と牛飼養も、深く結び付いている。

(2) 家計安全保障の危機

1) バナナの「家族産物」化

2000年以降、バナナの仲買人が毎日のように村を訪問し、軽トラックの荷台一杯のバナナを即金で購入し、村から持ち出している。価格はラワテ市場の8割程度であるが、そこまで個人で運ぶ場合の交通費を考慮すると、仲買人への販売の方が得になる。

そして2010年、ルカニ村民（主に女性）はマサマ西区・バナナ・グローワーズを設立し、会員（マサマ西区全体に拡がっており、会員数は148名。その内、ルカニ村民は48名であり、世帯数の14%が加盟している）自身のバナナはもちろん、周囲の村民からも集荷して、軽トラック（最盛期はローリー）1～2台の荷台をバナナで埋め、毎週火曜日と土曜日にクワ・サダラ市場（農民同士が取引するラワテ市場とは異なり、仲買人による取引が多いため、高価格での販売が可能⁹⁾に販売しはじめた¹⁰⁾。

この村民たちによる主体的なバナナ販売プロジェクトに加え、仲買人による購入も続いており、また村民による仲買も確認できる。コーヒー販売収入の激減時に危惧した¹¹⁾、過剰なバナナ販売が、現実になってしまった。最大の現金収入源であったコーヒーの価格暴落の結果、トウモロコシや林木にとどまらず、「女性産物」のバナナまでもが多くの販売収入を求めるものになりつつある。コーヒーからトウモロコシへの転作が進んで、日陰樹が逆に邪魔になっている（それゆえアグロフォレストリーも壊れつつある）ことも、過剰なバナナ販売を促している。

教育費（文具購入など）や医療費（薬品購入など）への支出も確認でき、バナナは既に、「男性産物」と「女性産物」の中間の「家族産物」になったという者もいる（より開発（近代化）が進んでいるマチャメ郡などでは、既に「男性産物」化している）。

2) 「収穫の安全保障+漸進的販売（自家消費分の畑での保管）」→

「食料消費の安全保障」の危機

この過剰販売により、バナナを主役とする「食料消費の安全保障」が脅かされている。村民は自家消費分を確保しているという。つまり「漸進的販売（自家消費分の畑での保管）」の範疇にあるととらえている。

しかし干ばつの影響も加わり、村内のバナナの数が増えている。ムレレンボのないクリスマスになってしまい、客をもてなせないと嘆く村民もいる。「自家消費分の確保」が意識されはじめたこと自体、バナナの激減や「食料消費の安全保障」の弱体化の証拠である（牛の飼料不足にまでは至っていない）。

3) 「財布機能→生活必需品消費の安全保障」の危機

バナナの「財布機能」については、仲買人やクワ・サダラ市場への販売で生じた現金を浪

費せず、本物の財布に入れて運べば代替できる。実際、買い物は安価なラワテ市場を利用し続けているが、バナナや牛乳ではなく、財布を運ぶ村民が増えた。

しかしクワ・サダラ市場（仲買人市場）においては、高価格販売が可能だが、価格変動も激しい（平均的な大きさのバナナについて、2010年：3,000～4,000Tshs、2011年：8,000～10,000Tshs、2012年8月：7,000Tshs¹²⁾）。大きな市場リスクに巻き込まれており、特に価格下落時には、「生活必需品消費の安全保障」が脅かされるように思う。

なお従来は、クワサダラ市場の価格がラワテ市場より2割程度高かったが¹³⁾、近年は東アフリカ共同市場の影響で、ケニア、ウガンダからも仲買人が来たり、トウモロコシの不作の影響でバナナへの需要が増えるなど、キリマンジャロ西部の6市場における仲買人の取引が活発化している（農民市場の消滅の危機）。特にバナナについては、価格差が生じにくくなっており、クワサダラ市場の価格下落時には、ラワテ市場の方が高価格の時もある。

生活必需品の価格差も縮小しており、バナナを販売した市場でそれらの買い物をする、従来からの「財布機能」も残ってはいる。しかし同時に、どの市場においても、バナナの価格変動が激しくなり、今やその「財布」は、「常に十分な額で満たされている」わけではない。

注

- 1) 辻村英之「キリマンジャロにおけるトウモロコシ・豆の生産・販売の特質—コーヒー危機にともなう商品作物の多様化と家計安全保障—」『生物資源経済研究』第12号、2007年、73-86ページ、辻村英之「キリマンジャロにおける牛の飼養・販売の特質—農家経済経営リスクと家計安全保障—」『生物資源経済研究』第16号、2011年、95-113ページ。
- 2) 2005年3月、5月の調査は、2003年度学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B））「タンザニア産コーヒーのフードシステムとの生産農村の持続的発展」、2005年8月の調査は、2004年度国立民族学博物館機関研究「運動の現場における知の再編」（宇田川妙子代表）による助成を受けている。
- 3) 辻村英之「タンザニア農村における貧困問題と農家経済経営—コーヒーのフェアトレードの役割—」野田公夫編『生物資源問題と世界』京都大学学術出版会、2007年、67-98ページ。
- 4) 辻村英之「キリマンジャロにおける牛の飼養…」『前掲誌』。
- 5) 辻村英之「キリマンジャロにおけるトウモロコシ・豆の生産…」『前掲誌』。
- 6) 辻村英之「キリマンジャロにおける牛の飼養…」『前掲誌』。
- 7) 2010年9月の調査は、2008年度学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「キリマンジャロの農家経済経営と農村発展」、2011年9月と2012年9月の調査は、2011年度学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「制度派農業組織経営学によるキリマンジャロ・コーヒーのフェア・トレードの評価」による助成を受けている。
- 8) 詳しくは、辻村英之「キリマンジャロにおける牛の飼養…」『前掲誌』、を参照されたい。
- 9) 詳しくは、辻村英之「キリマンジャロの社会経済構造と地域経済圏」『生物資源経済研究』第13号、51～67ページ、を参照されたい。
- 10) 高価格での販売に努め、それに成功した場合は2nd Payment で出荷者（組合員）に調整払いをする。
- 11) 例えば、辻村英之「増補版 おいしいコーヒーの経済論—「キリマンジャロ」の苦い現実—」太田出版、2012年、第6章、を参照されたい。
- 12) 2005年から2010年にかけて、物価は1.54倍になっている（National Bureau of Statistics in Tanzania,

辻村 英之：キリマンジャロにおけるバナナの生産・販売の特質

National Consumer Price Index(Revised), 2001-2010, を参照)。ちなみに2005年の為替相場（民間両替所における年平均）は1,131Tshs/米ドル、2010年は1,427Tshsである（Bank of Tanzania, *Bureau de Change Quarterly Transactions, 2001-2011*, を参照）。

13) 辻村英之「キリマンジャロの社会経済構造…」『前掲誌』。

（受理日 2013年1月11日）

